教育の広場

朝の読書

自分と出会う時間の大切さ 20年目を迎えた「朝の読書」

池田知隆

月刊「ニューライフ」2008年6月号

子どもたちの活字離れ、読書離れがいわれてから久しいが、最近の「朝の読書」の広がりには目をみはらされる。授業が始まるまでの10分間、児童・生徒と教師がいっしょに思い思いの本を読もうというこの活動は、1988年の千葉県の女子高校の教育実践で注目され、20年たった今では全国の7割を超す小、中学校で実施されている。わずか10分間とはいえ、「朝の読書」は子どもたちが自ら考え、自ら感じ、自分を見つめる時間である。明治以来続いてきた上からの「説明教育」に対して、自発的な「沈黙の（内省）教育」の大切さを示しているともいえる。日本の教育の質は、こんなところから静かに変わろうとしている。

学校に溶け込んだ「朝の読書」

「朝の読書」運動を進めている「朝の読書推進協議会」（大塚笑子理事長、事務局：トーハン広報室）の調べによると、08年4月11日現在での総実施学校は25609校（実施率67％）。その内訳をみると――

小学校　16006校（72％）
中学校　7744校（71％）
高　校　1859校（37％）

となっている。

全国の多くの教室で行われている「朝の読書」の実践例が同協議会のホームページに紹介されている。最新の滋賀県の高島市立湖西中学校での光景は次のとおりだ。

×　×

8時25分。チャイムと同時に放送室から落ち着いた音楽が流れ、各学級では朝読書が始まります。ほとんどの学級では全員が本を開くのですが…

年末や入試前には3年生の一部が「それどころじゃない」あれ？

1・2年生でも宿題を忘れた人が「こっそりやれば…」う～んダメだなぁ

…「朝読書の時間だぞ～」と先生の声。

でもそんな人たちはごく一部。友達の読書を妨げるような行為をする人は全然いません。家から持ってきた本や学級文庫を休み時間に読みふける人も増えてきました。楽しかった本を友達に貸して、「な、おもしろかったやろ」という会話もよく聞かれます。「先生も読む？」と回してくれたり、先生の本が生徒に回っていくことも。先生自らがお薦めの本を学級文庫にしている学級も幾つかあります。図書室の蔵書と混ざるのが、学期末のうれしい「困った」です。本校の朝読書は現在こんな雰囲気です。厳しくなくゆるくなく…。

「家では読書しないので、こんな機会でもないと読まない」

「朗読がつまらずに読めるようになった気がする」

「漢字がきらいじゃなくなった。慣れたら、まぁ読める」

「授業以外で知識が得られるのは、なんか楽しい」

「親しくなかった友達が同じ本を読んでいて友達になれた」

「続きが気になるから学校に来るのが楽しくなった。少しやけど」

「頭がすっきりするから。1時間目から良く回転する～といいなぁ」

「朝読書の時間が短い。授業をやめよう！」→それは無理だ（笑）。

×　×

こんな朝の光景が、都会はもとより山間の学校、離島や岬の学校でごく当たり前になっている。

だが、これほど急速に実施校が増えたのは、どうしてなのだろう。今の子どもたちの心の教育を考えるうえで、読書が欠かせない、という認識が教師たちの間に広がっているのだろうか。校長のリーダーシップが増し、積極的に推進しているのだろうか。

15歳の生徒を対象にした経済協力開発

海の恵み　にがりを残した

はかた
伯方の塩®

※伯方の塩®は、輸入天日海塩と海水を原料に使用しています。

伯方塩業株式会社
〒790-0813　愛媛県松山市萱町4丁目4-9
TEL(089)911-4140(代)　FAX(089)923-9671
ホームページ http://www.hakatanoshio.co.jp

機構（ＯＥＣＤ）の学習到達度調査（２００３年）によると、「趣味としての読書はしない」との答えが、日本は過半数を超えていた。主要12か国の中で群を抜いて多かった。いわゆる「学力低下」よりも、活字離れや読書離れの方がよほど危ういとも思える。いずれにしろ、学ぶことの始まりは、本に親しむことに違いないし、「朝の読書」の広がりは喜ぶべきことだろう。

４つの原則

「朝の読書」は、教育実践としては驚くほど簡単なもので、多くの学校が次の４つの原則をもとに実施している。

（１）みんなでやる（生徒と教師全員が同じ時間に同じ条件で取り組む公平さが基本）

（２）毎日やる（１日10分という短い時間でも、毎日行うことで生徒の読む力を育む）

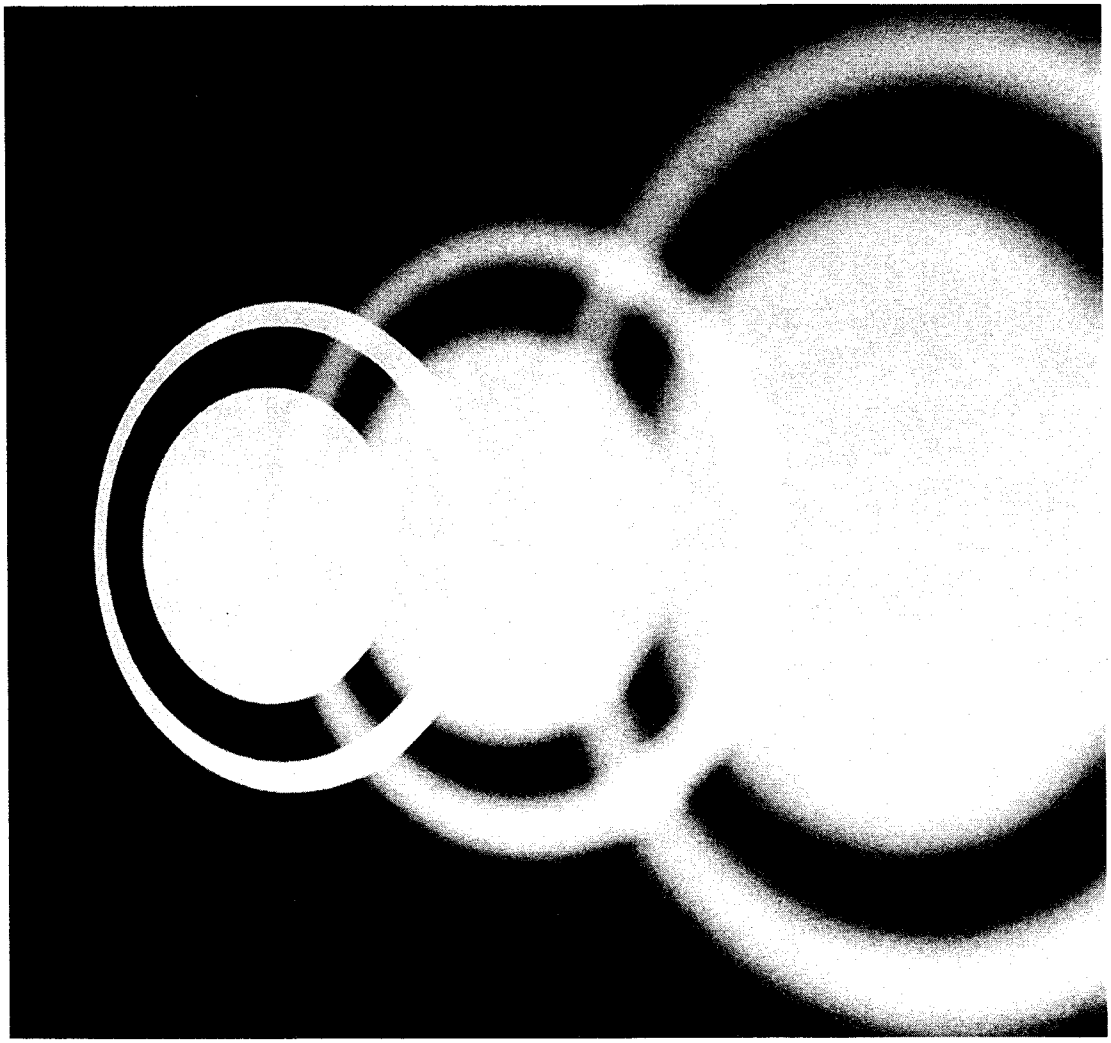
（３）好きな本でよい（読む本を子ども自身に選ばせることは、自分発見につながり、主体性を育む。ただし、マンガと雑誌は除く）

（４）ただ読むだけ（感想文や記録は求めない。本を読んでいるときの楽しく充実した思いを大切にする）

そうやって「朝の読書」を続けていくと、子どもたちの態度に落ち着きが生まれ、教室には「静寂の時間」がよみがえり、学校の雰囲気が変わっていくという。そんな「朝の読書」による「奇跡」を広く社会に示したのが、千葉県の船橋学園女子高校（現・東葉高校）の教諭だった林公さんだ。

現在、全国朝の読書連絡会名誉会長を務める林さんは昭和18年、埼玉県生まれ。東京大学文学部哲学科を卒業後、出版社勤務をへて、学校の教壇に立った。27歳のときだった。

そのころ、林さんが教室で目した生徒たちは荒れていた。私語や徘徊、授業妨害などの問題行動を起こしていた生徒たちに向き合うと、みんな心の奥深くに劣等感を抱いていた。そんな生徒たちの自尊感情を育てるにはどうすればいいのか。教師として何ができるのか。そう悩み続



けていた林さんの目に一冊の本が止まった。「読み聞かせ――この素晴らしい世界」（ジム・トレリース著、亀井よし子訳、高文研刊）。そこに報告されていた「朝の読書」の教育実践に、林さんは魂を揺さぶられた。

米国マサチューセッツ州にあるゲットウェイ公立中学校が学校ぐるみで取り組んだ「黙読の時間」。この中学校では、月曜と金曜の午前中、25分間の「黙読の時間」が設けられている。何を読むかは各人の自由。ただこの時間になると、生徒だけでなく、校長、教師から事務職員に至るまで全員がそれまでにしていたことを中断し、本を手にした。学校全体が静かになり、ページをめくる音しか聞こえない状況が生まれる。職員もその時間の仕事は禁止で、可能ならば、電話にも出ない、という徹底ぶりだという。

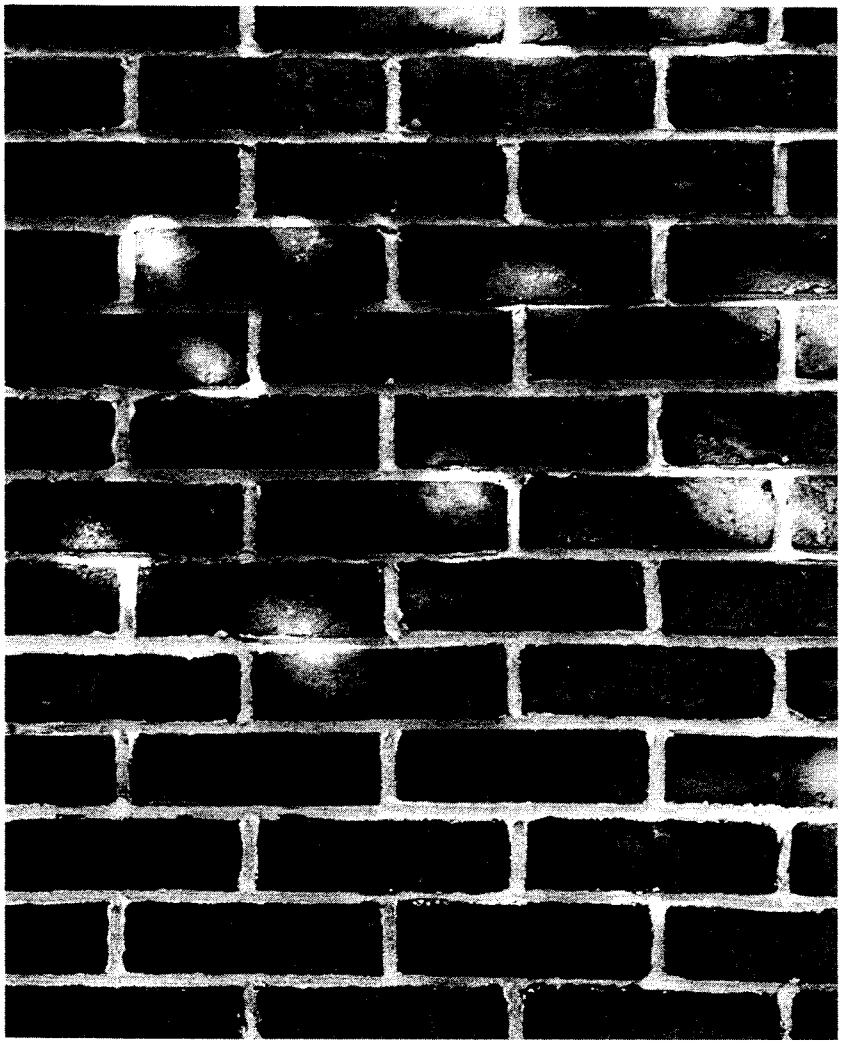
林さんは「この本を読んだ全国の先生方が、次つぎとこの実践に取り組み始めるだろう」と思い、さっそく88年4月、「朝の読書」の実践を取り組んだ。

たかが10分間だが、1日の始まりの時間は貴重だ。子どもたちは、表面はなんともないように見えても、親子関係や友達、教師とのあつれきや成績など、いろんな問題を抱えながら登校してくる。それをそのまま引きずって、熱くなった頭で授業に入るのではなく、ひと呼吸でき

る場があればいい。それが「朝の読書」だ。

「当時、私たちの学校はいわゆる偏差値による輸切りシステムの下で、生徒の学習面でも生活指導面でも危機的な状態に直面していたので、起死回生の逆転満塁ホームランでもかっとばす以外に活路はない」と思いつめていた林さん。実際にやってみると、生徒たちの態度がはっきりと変わっていった。

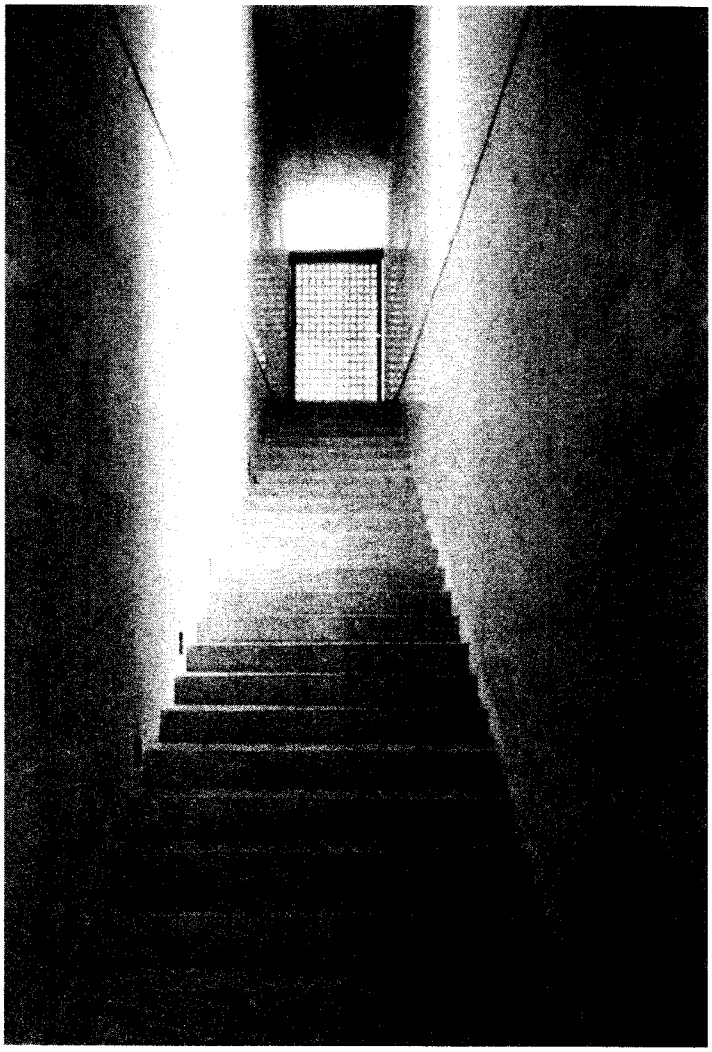
生徒たちはその時間に好きな本を手にして、自分と静かに向き合っていた。やがていらいらがおさまり、心が穏やかになる。いつしか教室内のいじめも減ったという。



5年後、「朝の読書」をめぐる生徒たちの感想文を高文研の編集部に送ってみると、全国のどこにもそれを実施している学校はなかった。全国に広がるとの予想が外れ、「学校の荒廃が叫ばれて久しかっただけに、一抹の寂しさ、と言うより何か恐怖のようなものさえ感じた」と林さんは振り返る。教育を荒廃から救いだしていくには、教師が中心になるほかはない。その教師たちは、目の前の現実にどう向き合っているのだろうか。林さんはそんな疑問を抱きながらも、それを打開する一つの道筋を見つけたとの確信を得た。

93年、その5年間の実践記録をまとめた「朝の読書が奇跡を生んだ」（船橋学園読書教育研究会編著）を出版。それと同時に林さんは全国4万校を超える小中学校、高校のほとんどにはがきを出して「朝の読書」の成果と実践を訴えた。費用200万円は貯金をはたいたが、「子どもたちに喜んでもらえる」という一念で、惜しいとも、つらいとも思わなかったという。

そんな活動が注目を浴び、96年に第44回菊池寛賞を受賞。それまで120〜130校だった実践校が、一挙に1000〜2000台へと広がった。



問われる教師の力量

「朝の読書」を学校全体で実施するには教師の間から当然のように反対の声があがった。

「読書は強制されてやるものではない。まして全校一斉にする必要があるのか」

「荒れた生徒たちが本を読むわけがない」

「私たちは国語の教師じゃない」

「朝の10分間は朝自習として、漢字や計算などのドリルの時間として確保したい。クラスの実態に合わせて自由に取り入れることにしてはどうか」

「朝の読書」の時間を実際にどう確保するかをめぐって議論がわいた。その一番の問題は、職員朝会だった。生徒だけに読書をさせて、先生たちは会議というやり方では、「朝の読書」は続かない。職員会議の時間を短縮したり、開催時間帯を変更したりして生徒と一緒に読書できるような環境をつくらなくてはならない。ホームルームを連絡など消極的なものでなく、生徒たちにとって心豊かにするものにしよう、と林さんは呼びかけた。

「担任は監視役ではない。読書は大人にとっても大切であり、楽しめるものであることを姿勢で示す。また、同じ時間を共有しているということが子どもたちに安心感を与えるのではないか」

林さんはこうもいう。

「私たちは読書指導をしようとしたわけではありません。今目の前で悩み苦しんでいる生徒たちに生きる力を与えたい、この困難な今を生き抜く力を身に付けてほしいと思ったのです。『本を読ませよう』と思ったわけでもありません。生きる力を身に付けるための多くの手だての一つとして、たまたま本を読ませることがあったにすぎません」(『心の教育は朝の読書から』メディアパル)

手に負えなかった生徒たちが目前で真剣に本に向かう姿を見て、「初めて教育の可能性を信じられるようになった」としみじみと語る教師が少なくない。「朝の読書」は何よりも教師を元気にしてく

れるものになった。

学校全体で取り組むうちに、学校本来の「学び舎」としての雰囲気がよみがえる。『朝の読書』で学内のすべての問題が解決するわけではない。だが、読書をすることで子どもたちの豊かな精神を育み、教師と子どもたちが一体となって学校が本来の姿を取り戻し、改革する具体的な方法であることは間違いない。

上からの運動拡大へ

1997年、神戸の中学生による連続児童殺傷事件などが発生して各地の教育現場は騒然となり、危機管理に迫られて「朝の読書」を導入するという学校も目立ってきた。2001年を文部科学省が「教育新生元年」と位置づけ、「21世紀教育新生プラン」と銘打って、あいさつのできる子、正しい姿勢と合わせて、朝の読書運動を三つの柱のひとつとして取り上げ、導入に弾みがついた。

政府も「子どもの読書活動推進法」を施行し、読書推進計画に打ち出した。小・中・高校で卒業までに一定量の本を読む目標を設定することや、学校図書館の地

域への開放のほか、読書に親しむ環境づくりを促進した。

何もしないで放っておいたのでは、子どもはなかなか本にひかれないのも現実だ。子どもだって何かと忙しいし、周りにはゲームやテレビなど魅力的なものがたくさんある。今、はっきりしているのは、大人の側からの働きかけが決定的に重要になっていることだ。

幼児期に親が本を読んでやったり、家族のだれかがよく本を読んでいたり、教師が熱心に本を薦めたりするなどの読書環境が、本好きの子どもを生む。家庭はもちろん、学校においても、子どもたちが読書の喜びを享受する機会をたくさんつくりたい。

新たな課題も

だが、「朝の読書」が全国的に広がる中で、新たな課題も見えてきた。

「朝の読書」を「総合的な学習の時間」に組み入れる学校が少なくないことだ。しかし、「朝の読書」と「総合学習」はその性質がまったく異なる。何も求めない自由な「朝の読書」に対し、「総合学習」は教育課程の中にある授業として「指導」と「評価」を必要としている。「朝の読書」は、授業としての指導や評価をしない自由読書が基本で、評価や競争が発生すれば「読書」が子どもたちに負担となり、形骸化する恐れもある。

さらに「朝の読書」は、「読書・読書教育」「図書館・図書館教育」と混同されやすい。「朝の読書」は、生徒指導、さらにいえば人間教育にも活用できる側面もあるかもしれないが、その基本は、児童・生徒たちに「主体的な生き方」を育てるというところにある。先生や親が選んでくれた本を読むのではなくて、自分で選んだ本を読むところにそのよさにある。

国語の力を付けることを目的として「朝の読書」に取り組み、すぐに効果がみられない、と取りやめた学校も見られる。「朝の読書」をするより、漢字練習を毎日十分間やった方がよっぽど効果があると考えてのことだ。しかし、「朝の読書」を続けると、知らないうちに国語の力がつくとはいえ、それは副次的なことで、それが目的ではない。

子どもたちにとって「朝の読書」の時間は、自分が何を求めているのか、を静かに見つめる「祈りの時間」でもある。始業前に「静寂の時間」が生まれ、その「沈黙」の時間を共有することで、教師も子どもも自らの関心、興味を見つめるきっかけになる。その意味でいえば、「朝の読書」は、現在の押し付け的な管理教育に対抗し、子どもたち自身が主体的に「生きる力」を育んでいく要素をもっている。

「朝の読書」が急激に普及していけばいくほど、いつしか全国的な「お上」からの「修養」運動にすりかわりかねない危険性もある。「朝の読書」は、あくまでも読書「指導」ではなく、子ども自身が本の楽しみを知り、自己発見していく場である。その原点を今一度しっかりと踏まえておきたい。

今、「スローフード」「スローライフ」への関心が高まっている。スローといえば、効率が悪く、無駄が多い…とみなされがちだが、スローという視点を通して自分たちの足元を見直すことで、地域や暮らしの課題が浮き彫りになってくる。外から押しつけられたものや、切り売りの知識はすぐ消え去ってしまう。しかし、自らの力で獲得したものは身につき、人格の形成に大いに役立つ。教育の世界もやはり「急がば回れ」とひと呼吸おいて考えるスローな視点こそが必要だ。「朝の読書」を通して、子どもたちはしっかりとした「生きる力」を育んでほしいものだ。

（毎日新聞論説委員）

NL

教育の広場

●自分と出会う時間の大切さ　20年目を迎えた「朝の読書」 6

NEWS ROTARY

2008

6

CONTENTS

●医療事故を防ぐ切り札になるか 14
エネルギー問題の現状と展望 20
介護が必要な高齢者のお口の健康に配慮した薬用歯磨き 30
子供からお年寄りまで楽しめる仔犬のパズルゲーム 34
モ～っと食べたくなる！　オージー・ビーフ 38
大和文華館展観のご案内 45
漢方薬入門 58
ルノワール＋ルノワール展 74

REGULARS

回虫博士の世界漫遊紀行―ばっちいものがなければ、命は生まれない―28
女性ホルモンの神秘と効用―40
たかが　われらが日々？―41
どれみの鼻歌―42
あなたと私の地震対―46
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？―49
あのときこんなこと―50
世界の食べ物―チーズ⑤―61
京都は優雅―京焼②―65
どこで憩うか―温泉―絶景露天風呂が凄い！公共の宿―68
ＬＩＢＲＡＲＹ―71
６月の運勢―75
編集後記―76

表紙写真　森村　進